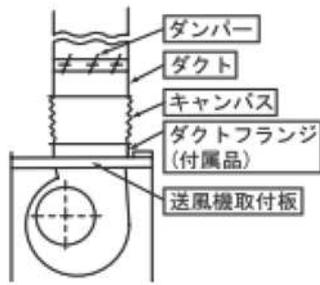


ダクトを接続する場合にはキャンバスダクトを介して接続すること（第14図）。



第14図 ダクトへのキャンバス取り付け要領
(出典：日立製作所据付点検要領書より)

高温多湿雰囲気内に設置する場合は本体の結露を生じる恐れがあるので、本体の断熱強化などを検討する。

外気取り入れダクトには逆流防止ダンパや、モーターダンパを設置し、ファン停止時に室内に逆流が生じないようにする。

(2) 室外機据付工事

設置場所は周囲から輻射熱を受けない、ドレン排水が可能かつ、メンテナンススペースが確保できる場所とする。

季節風が吹きつける場合は建物のかげを利用したり、防風板を設置するなどして吸入口、吹出口に風が直接当たらないようにする。

積雪地帯では室外機の熱交換器への雪の付着による目詰まりの防止と、放熱のための空間を確保するため、防雪フードを設置する（第15図）。その際必要に応じて、室外機ファンの高静圧仕様を採用する。

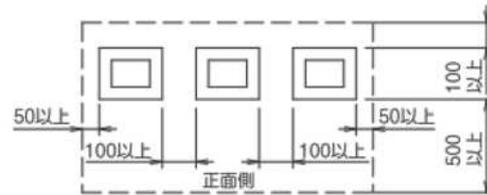


第15図 防雪フード（別売品）設置例
(出典：日立製作所カタログより)

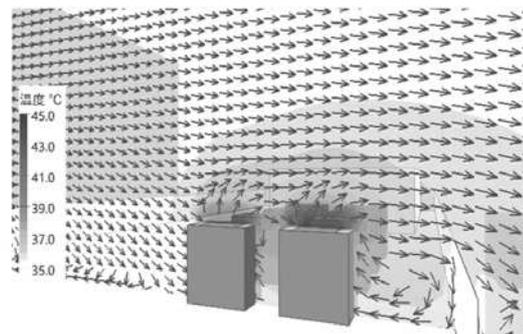
また、室外機の基礎高さは、想定される積雪高さ以上とする（できるだけ2倍の高さを確保するのが望ましい）。

耐風、耐震の必要に応じ、ワイヤー支持などの補強を行う。

通風路確保については、まず基本的にメーカーの推奨する室外機周囲スペースを確保する（第16図）。提示されている事例に当てはまらない場合や、2段積み、高層ビルバルコニーへの連続設置、電算室等重要施設向けなどの場合には、メーカーへ検討を依頼したり、コンピューターシミュレーションにより通風の障害、近接機への廻り込みなどが生じていないか確認する（第17図）。



第16図 室外機連続設置のスペース例
(出典：ダイキン工業据付説明書より)



第17図 気流シミュレーション例（屋上設置室外機）
(出典：(株)アドバンスドナレッジ研究所 提供)

室外機の騒音計算を行い、隣地境界線での騒音値が規制範囲内であることを確認する。オーバーする場合には遮音壁を設置したり、消音器の設置を検討する。最近の機種は夜間弱運転とするモードが用意されているものもあるので、検討に加える。